

研究ノート

社会学的エッセイ (その7)

—不透明社会の変化を読む—

片 桐 新 自

Sociological Essays (7):

Anticipating changes in an opaque society

Shinji KATAGIRI

Abstract

After the Great East Japan Earthquake, it became very difficult to predict the future of Japanese society. However, new trends have always occurred during such times. As sociologists, we should identify small changes, investigate past and present behaviors, and anticipate the future. This paper is one such attempt.

Keyword: Opaque society, new trends

抄 録

東日本大震災以後、日本社会の将来像は予想が困難な不透明な時代となった。しかし、そんな時代でも、趨勢的変動は常に生じている。われわれ社会学者は、この不透明な時代の中でも、その変化の芽を見つけ、その過去と現在を知ることで、今後の変化の方向性を語っていく必要がある。本稿は、そうした試みのひとつである。

キーワード：不透明社会、趨勢的変動

〈目次〉

はじめに

- 第1章 世界経済に明るい未来はあるのだろうか (2011.8.10)
 - 第2章 法と慣習 (2011.10.22)
 - 第3章 最近増えてきた光景 (2012.1.29)
 - 第4章 大学の秋入学を考える (2012.2.12)
 - 第5章 〈戦後日本社会〉君の高齢化 (2012.3.5)
 - 第6章 新型うつ (2012.4.30)
 - 第7章 民主主義も絵に描いた餅なのかもしれない (2012.8.30)
 - 第8章 就活後ろ倒しについて考える (2013.4.19)
 - 第9章 酔っぱらうのが目的? (2013.5.17)
 - 第10章 投票方式を変えてみたらどうだろうか (2013.7.15)
 - 第11章 「ノリ」文化とTV (2013.8.5)
 - 第12章 静かなる革命——昭和一桁生れの女性たちが変えた日本—— (2013.8.16)
 - 第13章 リニアモーターカーは必要か (2013.8.29)
 - 第14章 恋愛消滅時代 (2013.9.10)
 - 第15章 おしゃれの変化 (2013.11.24)
 - 第16章 日本と中国が戦争をする可能性は小さくないのでは? (2014.2.11)
 - 第17章 長寿は幸せなのだろうか (2014.2.13)
 - 第18章 「伊達マスク」だったのか! (2014.3.31)
- おわりに

はじめに

この「社会的エッセイ」シリーズもこれで7篇目となります。今回は、2011年8月から2014年3月までの2年半ほどの間に、私のWEBサイト (<http://www2ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/>) で公開したもののなかから、社会の変化について語ったものを中心に集めてみました。現在までの変化を捉え、今後の趨勢を予測するというのは、社会学がなすべき重要な仕事だと思います。もちろん、本来は丁寧なデータ集めの上でなされるべき作業ですが、厳密さを求めすぎて、時代について行けずに、「後付けの学問」としての仕事しかできないと社会学が思われてしまわないためには、アンテナを常に張り、現在進行形で社会分析を続けることは大切です。その意味で、こうしたエッセイ風のものであっても、文章化しておくことに意味はあると考えています。

特に今回の執筆期間は、東日本大震災と福島第一原発のメルトダウンという日本社会が想定もしていなかったリスクを抱え込んだまま、将来のあるべき姿が見えない不透明な時代になっていました。確実に進む高齢化とそれに伴う様々な問題に対する解決策も見えず、隣国である中国、韓国との関係は悪化したままです。同盟国・アメリカとの関係性すら、

TPP問題によって単純に良好な関係とは言えなくなってきました。2012年の暮れに成立した安倍内閣は「アベノミクス」の名の下に経済成長戦略を打ち出していますが、その実態はと言えば、ただ市場に資金をばらまくことで景気を上向かせようというだけのことであって、本格的な経済成長戦略ではありません。多くの国民は、このアベノミクスで、日本がまた右上がりの国になるとは思っていないでしょう。日本の、いや世界の未来は、不透明なままです。

社会を捉えることを誕生の時から自らに課してきた社会学は、この不透明状況の中に変化の趨勢を捉える兆しを見つけ出し、多少なりとも今後の社会の姿を示すを試みなければならぬと思います。本稿はそうした試みのひとつです。議論に粗さはたくさんあると思いますが、守備範囲を固めて批判を受けない研究論文を書くことだけが社会学者の仕事ではないでしょう。粗くても大胆な分析と予測も社会学者がなすべき大事な仕事だと思います。

各章タイトルの後に入れてある日付は、WEBサイトで公開した日を示しています。一応、公開順に並べていますが、個々の章は独立していますので、興味をもった章から読んでいただいても構いません。

第1章 世界経済に明るい未来はあるのだろうか（2011.8.10）

世界経済がおかしくなってきました。日本の経済だけがだめなのではと思っていた人も多いと思いますが、ここに来て、アメリカ国債の格下げ、ロンドンの暴動、世界株安、こんなぼろぼろの日本なのに円高になるなどで、世界経済がおかしいのだということが一気に見えやすくなりました。直接的原因はリーマンショックだそうですが、もっと長期的な視点に立ってみると、リーマンショックといった小さな問題ではなく、人間の限らない欲望に対応するだけの余力が地球社会になくなってきていることが原因なのではないかという気がしてなりません。人類はその誕生から欲望をエネルギーとして、社会を「発展」させてきました。貯蓄可能な食（穀物、家畜）を見つけ、安定的な供給が可能になるように改善し、人口が増えれば土地を切り開いて耕地や牧草地を広げて食糧供給力をあげ、さらに技術革新によってたくさんの人間がより豊かで楽な生活を送れるようにしてきました。しかし、地球には限られた大きさと限られた資源しかありません。この右上がりの欲求充足が永遠に続くことは論理的にはありえません。この地球に留まる限り、永遠に続く人間の欲望の拡大に対応するだけの術はいつかなくなるはずです。私が中学生の頃の世界

人口は37億人程度でしたが、今や70億人です。人類誕生から何百万年もかかって到達した人口と同じほどの人口が、その後50年も経たないうちに増えてしまったのです。横軸を時間、縦軸を人口としてグラフを描けば、最近のグラフはほとんど垂直に立っているような状態になり、もうこれ以上横軸は伸びない（つまり時間が未来に進まないような）グラフに見えます。このままの状態で人類は22世紀を迎えることができるのか、本気で心配しはじめています。

対応策はあるのでしょうか。正直言って、社会的には考えられないです。私が考え得るのは、実現可能性を無視したSF的な発想くらいです。(1)月や火星などを人類が住めるようにして多くの人類が移住する。(2)技術開発によって極少量で満足できる食糧（栄養剤的なもの）を作る。（今でも点滴だけで生命維持は可能なので、これはもしかしたら科学的には可能なかもしれませんが。しかし、もしも可能だとしても、通常の社会活動をするほどの栄養を摂れるのかどうか、食を楽しむという欲望を捨てられるのかどうか問題になりそうです。）(3)人類自体が量的に大きく減少する。あるいは、環境に適応しやすい小動物化する。（最近、恐竜は鳥になったというのがほぼ科学的に公認されるようになってきていますが、もしかしたら肥大化しすぎた恐竜はそうやって種として生き延びる手だてを見出したのかもしれないと思うと、人類も変態していく可能性はあるのではないかとも思います。）こんな大問題を前にすると、社会学は無力だなと感じます。ただ、他の分野の専門家も似たようなものかもしれません。世界経済は、人類は、どこに行くのでしょうか。そして、未来はあるのでしょうか。

第2章 法と慣習 (2011.10.22)

最近東京のJR中野駅前で自転車の一斉取締が行われ、わずか1時間の間に信号無視で6人が検挙、ブレーキが両輪についていない違法自転車使用で1人が検挙、イヤホン使用で9人が警告を受けたというニュースを見ました。みんな顔にはほかしが入っていましたが、「自転車なのに、なんでこんなに厳しくするの？」という怪訝な感じは伝わってきました。

法的には、自転車は軽車両で道路交通法に従わなければならないわけですが、歩道を走ってもいいことになっているので、多くの人は自転車の利用に関しては、歩行的な基準でやっていいこととイケないことを決めていると思います。しかし、最近自転車と歩行者がぶつかるという事故が増えてきており、業を煮やした警視庁が動き出したということのようです。今はまだ自分の住んでいる所では、そんな取締は行われていないから大丈夫

だろうと思っている人たちが多いかもかもしれませんが、あまり安穩とはしてられないと思います。自転車に関しては、全国的に厳しくする流れはあるように思います。私も厳密にいったらやってはいけない自転車行動をたくさんやっていると思います。幸い、人とぶつかったことはないですが、だからいいというものではないでしょう。でも、これからは自転車に乗る場合は徹底した法律遵守の精神でやっていくかという、きちんとやりきれ自信はあまりありません。スピードの出し過ぎや危険な行動、信号無視などがいけないのはもちろんですが、中にはこのくらいは認められてもいいのではと思うことも結構あります。

実はこの自転車の例のように、法律ではこう決まっている（あるいはどう決まっているかよく知らない）けれど、実際には社会慣習的にはこのへんまではOKだろうと考え、その社会慣習に従って行動していることは山のようにあります。というか多くの人にとって、それこそが行動選択の基準になっていると思います。制限速度より少しオーバーするスピードで走るなんていうのは今でも実質的に認められている社会慣習でしょうが、昔より厳しくなっていることも多々あります。法律が変わって社会慣習が変わるパターン、法律は変わっていないが、厳密に適用されはじめることで社会慣習が変わるパターンなどがあります。前者の例としては、酒酔い運転の厳罰化などが典型例としてあげられ、後者の例としては未成年（特に大学生）の飲酒などがあげられます。社会慣習の変化が受け入れられるためには、大衆レベルでの支持がなければなりません。その支持が広がるためにはたいへん事故がきっかけにあるものです。酒酔い運転の場合は、酒酔い運転で死亡事故を引き起こすという事件が大々的に取り上げられましたし、未成年大学生飲酒の場合は、新歓コンパで無理に飲まされて急性アルコール中毒を起こして亡くなる学生が少なくないというニュースが大きく取り上げられたりしました。

社会慣習は厳しくなる方向ばかりでなく、緩くなることもあります。法律的な規制はないですが、電車の中での化粧、飲食などは、以前は社会慣習的に認められる行動ではありませんでしたが、今やいけないことだと思っている人はそう多くはないのではないのでしょうか。社会慣習が緩くなる方は、厳しくなる場合と異なり、これといったきっかけはなく、徐々に変化していくことの方が多いと思います。こうした趨勢的な変化は自然に根付きやすいですが、厳しくする方の意図的な計画的変化は大衆的な支持がないところにやや無理に行おうとする場合もあり、その時には、思いがけない反発を引き起こしたり、予想外の帰結を生みだしたりすることもあるものです。セクハラ、ストーカーという言葉が登場し普及する中で、男女の接近の仕方に関する社会慣習が厳しくなり、結果として男子の草食

化を招いたというのは、ずいぶん前から私が主張してきたことですが、最近さらにそれに輪をかけるような条例が京都府で作られました。18歳未満のポルノ画像や映像を所持するものに対して知事が廃棄命令を出すことができ、従わなかった場合は30万円以下の罰金を科すのだそうです。所持しているだけで罰金って、これではまるで「性の治安維持法」です。こんな法律ができれば、男性はもう女性に対する興味をまったく持たないように意識改革をするしかない気がします。日本の少子化をもっと進めたいのかと思わせるような愚法だという気がします。

第3章 最近増えてきた光景 (2012.1.29)

最近有名な待ち合わせ場所に通りかかると、白髪や髪が薄くなったおじさんたちがラフな格好で数人集まり、他の仲間がやってくるのを待っているという場面をしばしば見かけるようになりました。この待ち合わせおじさんたちのパターンには2種類あります。ひとつは、午前中に見かける光景で、リュックを背負っていて、これから町歩き、山歩きに出かけようとしているのだらうと推測できるパターンです。もうひとつは夕方早めの時間帯（午後5時台）に、駅などで待ち合わせしているおじさんたちで、こちらはほとんど手ぶらというくらい、荷物を持っておらず、行き先はきっと居酒屋なんだらうと推測されます。どのおじさんも髪は白くなったり薄くなったりしていますが、血色は良さそうで、足腰もしっかりしていて、とても元気そうです。おそらく団塊世代なのだと思います。

団塊世代とは1947～49年に生まれた世代のことを言うのはご存じの通りですが、今この世代のおじさんたちは全員60歳代前半となり、定年退職となり、時間を持てあましているわけです。まだまだ体も元気で、お金もそれなりにあるおじさんたちは、これまで仕事をしていたときにはできなかったような楽しみを実践しつつあるのです。団塊世代は、人口の非常に多い世代ですから、この世代がある年齢期に入るたびに、新しい現象が生まれてきました。週刊少年マンガ誌が誕生したのは、1959年で、彼らが10～12歳になる年でした。青年コミック誌（『週刊漫画アクション』と『ビッグコミック』）が登場した1968年には、団塊世代は19～21歳でした。そして、大学紛争が一番激しくなったのもちょうどこの頃でした。結婚をはじめた団塊世代の作る家族は、「亭主関白&内助の功」とは違う、友だちのような「ニューファミリー」と言われたものでした。そして今、リタイアしたばかりでまだまだエネルギーに満ちた団塊世代は、「ニュー60代」として、また新たな歴史を作り出すような気がします。私のような団塊世代より少し下の「しらけ世代」は、永遠に団塊世

代が生みだす事象を是々非々で受け止めながら生きていく運命にあります。「ニュー60代」が何を生み出すのか、すぐ下の世代の人間としても、また社会学者としても注視していきたいと思います。

第4章 大学の秋入学を考える（2012.2.12）

東京大学が秋入学を本格的に行う姿勢を示したことで、他の国立大学や有力私大にも同調する動きが出てきています。現行の初等・中等教育のスタートと企業の新卒採用を4月からのままにしておくと、高校卒業後と大学卒業後に各半年の空白期間ができます。これについては、ボランティア活動をやってもらったり、長期旅行をするなどすれば、有効に活かせるだろうという考えのようです。確かに、東京大学に行くような人材であれば、時間の無駄は嫌いでしょうから、何か自分なりに有効に使うことを考えるでしょうが、この秋入学が一般化して多くの私立大学にまで広がった場合、この2回の半年の猶予期間を無為に過ごす人もたくさん出てくることでしょう。早く働いて自立してほしいと思っている親にとっても、給料を稼ぐのが1年遅くなるのは痛いと思う人も少なくないでしょう。本来、大学の秋入学・秋卒業が機能するためには、初等・中等教育も官庁・企業もすべての年間スケジュールが秋始まり、秋終わりになっているべきなのです。大学だけが1人走ることは、マイナス面の方が多いと思います。東大の論理は、世界（欧米）の大学基準に合わせ、優秀な人材が海外から入ってくることも、出て行くこともしやすくするためということのようですが、これを突き詰めていくと、東大の公用語は英語にするという考え方も出てきそうです。

「国際化」というのが、今やありとあらゆるところで「錦の御旗」のように使われていますので、誰もその方向性に関しては文句を言えないような空気になっています。しかし、単純に国際化を進めることが、日本にとってプラスになるのかどうか、一度しっかり考えた方がいいのではないかと思います。本気でやるなら、日本全体の公用語を英語にして、国民全体から英語コンプレックスをなくさないとだめでしょう。中途半端な「開国」はマイナスになる可能性の方が大きい気がします。日常言語として英語を使っている外国人が、その普通の言語能力によって、日本社会の中で地位を獲得しやすくなり、能力は高いが英語が苦手というだけで、日本人の優秀な人間が排除されるということが起きたら、本末転倒でしょう。英語公用化まで考えないとしても、欧米や中国の基準に合わせて、大学や大学院を開くことで、海外からハングリー精神をもった人々がたくさん来て、企業もそうし

た外国人を積極的に採用し始めたら、今でさえ就職難の日本の大学生はさらに就職難に陥ることでしょう。4月入学・卒業・就職という制度が、日本にとって適度な人材流入の「関税」のような機能を果たしてきたのに、その点について議論を深めないまま、秋入学を進めてしまうことは、言ってみれば、何の議論もしないまま、大学に関してはTPP参加に舵を切るようものです。

日本人がもう「日本」とか「日本人」にこだわらないという覚悟ができてきているのなら、それもよいでしょう。日本に暮らしたい人はどんどん日本に来てもらい、なりたい人はどんどん日本人になってもらう。そういう行き方こそが、これからの日本の進むべき方向だと、多くの人考えているなら、聖域なき開国をすべきでしょう。そうではなく、これまで創りあげてきた日本という社会の伝統に基づいた存続を考えるなら、「国際化」の名の下に盲目的に欧米基準に合わせていくことに対しては警鐘を鳴らすべきではないかと思えます。

第5章 〈戦後日本社会〉君の高齢化（2012.3.5）

ある番組で、首都高速道路がかなり古びてきており、その補修をどうするかということが大きな問題になりつつあるというニュースをやっていました。首都高速道路が最初にできたのは1962年で、もう50年経っています。そんな一番古いものばかりでなく、30年以上使われてきた道路はかなり痛んできており、補修すべき箇所は9万箇所以上あるそうです。万一地震等が起きた場合は、崩壊の危険もあるということでした。首都の大動脈ですから長く通行禁止にして補修することも難しいでしょうし、そもそも土台等が弱くなってきている場合には、補修で根本的な対策になるわけではないようで、莫大な費用がかかりますが、掛け替えとかトンネルを新たに掘ることなども考えられているそうです。

そのニュースを見ながら、高速道路だけでなく、高度成長期に造られた様々な構造物がそろそろ耐用年数を超え始めてきているのだと改めて気づかされました。1945年8月にアメリカという父と象徴天皇制という母を両親に誕生した新生〈戦後日本社会〉君は、今年67歳になる老齢期にさしかかっています。社会は人間よりはるかに長く生きるはずだと思っただけでしたが、インフラなどの構造物の寿命を考えると、ある体制の社会は人間と同じ程度で一度衰亡期を迎え、新たな再生を必要とするのかもしれないと思い始めています。

1960年から1973年まで続く高度成長期は〈戦後日本社会〉君にとっては15歳から28歳という青春期にあたる時代で、まさにどんどん成長していく時代でした。1986年から1991年

のバブル期は41歳から46歳にあたりますが、ここが〈戦後日本社会〉君のもっとも華やかな絶頂期だったということになります。今、60歳代半ばを過ぎた〈戦後日本社会〉君は、青春時代に基礎作りをしたものがさすがにもう使えなくなってきて、どうしたらいいだろうかと悩み始めているということになります。この歳になって、簡単な治療（補修）で根本的な若返りが図れるかと言えば、やはり無理なのだろうなという気がします。明治維新という再生を経て誕生した〈大日本帝国社会〉君は78歳で寿命が尽きました。〈戦後日本社会〉君はあと何年生きられるでしょうか？

東日本大震災と原発事故は、もしかしたら〈戦後日本社会〉君の致命傷になっているのかもしれない。このままぼろぼろになりながら100歳、120歳まで生き続けることになるのでしょうか。その場合は、やはり高齢化の進展として活力のない社会になりそうな気がします。衰亡そして再生の道筋がどうつくのかが、今の私にはまったく見えません。強いて言えば、TPPをきっかけに完全開国をして新日本人による言語も英語を国語とするような〈New Japan Society〉君にしたなら、再生にはなるのかもしれない。それがいいことかどうかはわかりませんが、一定の体制の下で成立する社会に寿命があるならば、そういう未来もあながちありえなくはない気がします。

第6章 新型うつ（2012.4.30）

昨晚放送されていたNHKスペシャルはご覧になりましたか。最近の若者に多い「新型うつ」という「病気」についてでした。これまでの「うつ」と言えば、真面目で責任感の強い人間がある時もうこれ以上はできないと思ってしまい、すべてにやる気が出なくなり、生きることさえつらくなり、自殺願望にまでつながってしまうというイメージだったと思いますが、「新型うつ」という「病気」は、仕事に関してはもうできない、やれない、会社に行きたくないという気持ちになるものの、遊びに行ったりすることは楽しくできてしまうという「症状」なのだそうです。

昨日のNHKスペシャルでは、実際にあった話を元にドラマ化していましたが、会社でのミスを上司に怒られ、その上司を恨み、眠れない、落ち着かないという症状が出ていると病院で話したところ、「うつ」と診断され、喜んで3ヶ月の休職届を出し、その休職期間中に海外旅行に行ったり、飲み会をしたりして楽しんでいるという若者が描かれていました。ドラマ化されているので、幾分誇張されているかもしれないと思われがちですが、実際の会社の人事部では、今や似たようなケースがしばしば生じており、「病気欠勤期間中は

病氣療養に専念しなければならない」と就業規則に新たに書き込んだ会社があったり、病気で休職期間中の従業員の家庭訪問をする会社もあると紹介されていました。

見ながら率直に思ったことは、これは病気ののだろうかということでした。パーソナリティの問題ではないのだろうかというのが多くの人が感じたことではないかと思います。長年若者と関わり、そういう研究もしていますので、若者が打たれ弱くなっていること、頑張ったのだから結果がどうあれほめてほしいと思いたがる人が多いこと、つらいことやしんどいことから逃げたがる人が多いことなどは、私にとって周知の事実です。豊かで優しい社会の中で育った若者たちは、実社会に出た途端、その厳しさに愕然として、不適応を起こします。会社に行きたくないという気持ちにもなるでしょう。でも、お金を稼ぐというのは楽なことではないのだから、こういうことも乗り越えて行かなければならないのだと、多くの人はこれまでの甘すぎた人生はもう望めないのだと覚悟して、自らのパーソナリティをたくましいものに徐々に変えていくものです。これは、何も最近に始まったことではなく、近代教育制度ができ、学校に通っている間は「子ども」でいいのだという価値観が一般化してからは、大なり小なり誰もが通ってきた道でした。それが、最近はその不適応から適応に向う途中段階で「病氣」と診断してくれる医者があり、休職ができてしまうわけです。本当にそれでいいのだろうかと頭を抱えたくくなります。

日本もグローバル化という大競争世界に巻き込まれているという事実は誰もが認めていることなのに、そこに巻き込まれ戦わざるをえない企業の一員である自分は厳しい競争に晒されるのは嫌ですというのは通らない話です。インターネット回線もすべて断ち切り、鎖国でもして、日本的な過剰な優しさに満ちた「世界一幸せな国」でもめざすなら、日本流の甘い社会も夢見られるのかもしれませんが、誰もそんな方向は望んでいないはずで、世界は競争に満ちた社会であり、そこで生きていこうとするなら、競争に勝てないまでも負けても生きていける強さを身につけるしかないのです。「うつ」と診断されて、喜んでいる場合ではありません。

第7章 民主主義も絵に描いた餅なのかもしれない (2012.8.30)

ソ連や東欧の社会主義国家が1990年代に次々に崩壊し、中国が「近代化」の名のもとに資本主義的方针を打ち出し成長を遂げていった時、社会主義は、理念は素晴らしくても現実の体制としては崩壊せざるをえないのだということに多くの人が気づいたわけですが、今や民主主義も同じように理念はすばらしいが、理想的な民主主義は現実に維持するのは

困難であることを指摘せざるをえなくなっています。

長らく自民党の1党支配体制が続き、政権交代が起きないことが日本の民主主義の問題点だと思ってきましたが、民主党が政権を取った後の政治を見てみると、結局こんな政治家たちを当選させてしまっている有権者のあり様が問われなければならないのだと思います。次も橋下徹率いる「維新の会」が、手垢がついていないというだけの理由で、とりあえず勝たせてみようか思っている有権者は多いように思います。もしもそんな事態になったら、今よりひどいことになるでしょう。とりあえず選挙に勝って国会議員になりたいと考えているような輩しかいません。候補者自身の知識も経験も不問なまま、橋下の「維新の会」だから投票するという人がたくさんいそうです。こんな感覚的な投票行動しかできない人間の集まりに、民主主義を持ち込んでも、「ポピュリズム」にしかなりません。

民主主義が理想的な形で存続するためには、社会で生じている諸問題に関して識見を持ち、感覚的ではなく、自分のためではなく、社会のために働く政治家は誰かを把握する目をもった有権者が必要ですが、そんな条件をクリアできる有権者なんて1%いるでしょうか。日本は先進国の中で特に少ない方だと思いますが、他国にしても、そんな人が2割を超える社会なんてないのではないのでしょうか。「すべての社会のメンバーが主権者としての自覚をもって政治にかかわる体制」が民主主義なのですが、こんな理想的条件が満たされることはまずないでしょう。つまり、民主主義も理想的な形では決して実現し得ないものなのではないかという気がしてきています。

第8章 就活後ろ倒しについて考える（2013.4.19）

安倍総理からの要望を受け、経団連が2016年卒業生から、3年生の3月求人開始、4年生の8月採用選考開始とするように倫理憲章を変えることを決めました。大学生を教える教員としては、この就活時期の変更には嫌でも関心を持たざるをえません。長らく3年生10月求人開始（2011年度からは12月開始）、4月選考開始でしたので、大きなスケジュール変更になります。このスケジュールを安倍総理が要望したのは、3年生の間は留学に行けるようにすること、また大学側からもなるべく学業に専念できる時期を延ばすために就活時期を遅くするという要望が出ていたことなどが理由のようです。さてさて、このスケジュール変更は大学生にとってプラスになるのでしょうか。

正直に言うと、かなり疑問です。まず留学には行きやすくなるのは確かですが、かつての若者ほど欧米崇拜信仰のない今どきの学生たちは、行きやすくなったからといって

必ずしも留学に行かないのではないかと思います。海外旅行や1ヶ月程度の語学留学なら経験してみたいけれど、1年も留学したいという希望を持っている学生は極少数ではないかと思います。半年以内の留学なら、現在の就活スケジュールでも3年生の春学期までに済ませれば、就活にはまったく問題はなく、行きたい学生たちはそういう行き方を実際にしています。1年行く学生たちは、多くの場合1年卒業を送らせていますが、社会に出るのが1年遅れるのは大きなマイナスにはなっていないように思います。現在の学生たちのドメスティックな志向性を変えるには、留学していなければ就職はできないくらいの条件にしないと難しいでしょう。ただ、企業も留学したから、英語ができるからと言って、自動的に有能な人材を意味するわけではないと知っていますので、そんな条件をつけて、みすみす有能な人材を逃がすようなことはしないと思います。

次に、大学側が求めている学業に専念できる時期を延ばすという狙いですが、3か月就活開始時期が延びたからといって学生たちがより勉強するようになるとは私にはとうてい思えません。遊ぶ期間が延びるだけです。むしろ、今のスケジュールなら、長い春休み期間である3年生の2、3月が説明会などでもっとも忙しい時期で、4月に選考が開始されると一気に内々定をもらい、大学に戻って卒論に取り組むようになってくれる学生も多いのに、3月から求人開始、8月選考開始では4年生の春学期は学生たちに大学に来させることすら難しくなり、余計学業の妨げになると思います。また、今のスケジュールなら就活を夏休み前に終えた学生たちは9月あたりで、海外旅行を経験するということができますが、新しいスケジュールでは秋の予定は立てにくく海外に行くのは難しくなり、結果的により海外経験を持たない学生たちを作ることになりそうです。本当に大学生たちに4年間の学業に励む時間を与えるつもりなら、就活は卒業後に行い、10月1日から働き始めてもらうというくらいにしないといけないと思います。まあでもそうしたとしても、4年間をしっかりと学びのために使おうという学生は極少数で、多くの学生は4年間を遊んで暮らすでしょうが。

私は、就活を通して、生き方を考えるようになり、打たれ強くもなり、急速に成長してきた学生たちをたくさん見てきましたので、3年生の冬頃から就活が始まるのは悪くないと思っていました。学業を進める上でも、3年生の春休みを中心に就活の一番忙しい時期があり、4月以降徐々に内々定を取り、学生たちが大学に戻ってくるという現行のスケジュールはなかなかいいと思っていました。それゆえ、今回の安倍総理の要望を経団連が飲んでしまったことが残念です。しかし、この新スケジュールに基づく倫理憲章もいつまで持つかわかりません。かつて存在した、4年生の5月求人開始、7月採用選考開始という

就職協定がいつのまにか守られなくなって、ついに現実を容認する形で放棄されたように、今回の倫理憲章も徐々に軽視され、「青田刈り」と言われるような憲章破りの動きを見せる企業がどんどん出てくることになるのではないかと思います。今のスケジュールというのは、企業と学生との利害が一致して自然に一番負担の少ない所に落ち着いていたものなのに、それを無理矢理変えるのはマイナスの方が大きいという気がしてなりません。社会学の概念を使って予測すれば、趨勢的変動で一番軋轢の少ない収まりのよい状態にあったものを、上からの計画的変動で無理に変えるのはうまく行かない可能性が高いということになります。まあでも、とりあえず数年はこのスケジュールを多くの企業が守るでしょうから、こちらもそれに合わせてスケジュールを組んでいかなければならないことになりそうです。さてさて、どんなことになるのやら。

第9章 酔っぱらうのが目的？（2013.5.17）

先日ゼミで「大学生の飲酒文化」を研究対象にしている学生が、自らの経験を踏まえて、テニスサークルの飲み会は酔っぱらうのを目的に行われていると述べたのを聞いて軽くショックを受けました。確かに、昔から人は、つらいこと、悲しいこと、苦しいことがあったときに、一時的にでも酔っぱらって忘れてしまおうとしたりもしてきましたが、テニスサークルの飲み会はそんな理由で酔っぱらおうとしているのではないことは明白です。おそらく非日常性を高め、祭り気分を作り出すためでしょう。

10年以上前に、やはりゼミでテニスサークルの「イッキ飲み」について議論したことがあって、その時には「イッキ飲みのコールに乗せてあげることで、日頃スポットが当たりにくい人にも順番でスポットを当てることができるので、それなりに意味があると思う」という意見があり、「なるほど。そういう側面もあるのか」とちょっとだけ納得したこともありましたが、今回のように酔うのが目的と言われてしまうと、やはりそれは違うだろうと言いたくなります。誰も潰れずにきちんと解散になったら何か物足りないような気持ちになり、誰かが酔っぱらって潰れるという事態が生れて初めて「ああ、今日も盛り上がったなあ」とか言っているのだとしたら、そんな飲み会は絶対にやめさせなければならないと思います。学生たちがそういう飲み方をしているのを知っていて学生に場所を提供しているお店は営業停止にしてもいいのではないかと思います。

酒は食文化の一種です。おいしい料理とともに味わい、食をさらに豊かにするためにあるのです。その意味では、様々な酒を味わえるのは幸せなことだと思っていますので、学

生たちにも「ちょっとはお酒が飲めるようになった方がいいと思うよ」といつも言っているのですが、身近でこんな馬鹿な飲み方をしている学生たちがいて、お酒と言えば、酔っぱらい、潰れる、と連想ゲームのようになってしまっているのは、お酒の飲み方をちゃんと覚えようとする学生たちも少なくなってしまうのは当然でしょう。かつて社会慣習的には許容されていた20歳未満の大学生の飲酒が厳しく規制される流れになってきたのも、こういう馬鹿な飲み方が一般化してきたのは仕方ないところでしょう。

しかし、一体いつからこんな馬鹿な飲み方が一般化してきたのでしょうか。私の記憶では、「イッキ飲み」が学生たちの間で普及しはじめたのは、1980年代初めだったように思います。1970年代半ばに学生生活を送った私たちの時にはまったくない文化でした。せいぜい遅れてきた人に「駆けつけ3杯」と言って、コップに3杯ビールを飲んでもらうという習慣があった程度でした。(たぶん、これは遅れてきてすでにみんないい感じで酔っているのです、早くみんなと同じレベルになってほしいというところから始まった習慣ではないかと思います。) 私が初めて「イッキ飲み」を見たのは、大学教師になって1年目の1983年のことでした。学生たちが「イッキ、イッキ」と囁き立てる中でビールをあおる学生たちを見て、「関西にはこんな習慣があるのか」と目を丸くした覚えがあります。関西発祥かどうかはわかりません。私は1970年代末から1980年代はじめは東京で大学院生をしていて、一般の学生たちの飲み会を目にする機会があまりなかったので、東京でもすでにやっていたのかもしれませんが。まあでも相当に広まっていれば、話題にもなるでしょうし、飲み屋でも見かけたりはするでしょうから、見たことも聞いたこともなかったということは、やはりこの1980年代初め頃に生まれた新たな習慣ではないかと思います。

こうした飲み方が生れた社会的背景を考えていくと、以下のようなことがあげられるように思います。(1)転換期としての1970年代を経て、学生文化が変化したこと。(2)チェーンの居酒屋が増えて行ったこと。(3)ジョッキの生ビールというのがどこでも飲めるようになったこと。(1)は一番重要なポイントです。1960年代までの学生たちは社会関心、政治関心が高く、ある意味でまじめに社会のこと、政治のことを考えていました。そんなに考えていない学生——ノンポリ学生——ももちろんいましたが、キャンパスの支配的な空気が政治的なものであったため、ノンポリ学生は、時代を代表する学生にはなりえていませんでした。それが1970年代という過渡期の10年間を経て1980年代を迎えた時には、ノリを重視して明るく楽しく過ごさなければ大学生活ではないという時代になっていました。楽しいこと、盛り上がること、乗れることをいつもやっていたいという気分が、酒を飲むことすらもエンターテインメントにしてしまおうとして、こうした「イッキ飲み」のようなもの

が生み出されたのだろうと考えられます。

(2)は、もしかしたら原因と言うよりは、こうした盛り上がる飲み会をしたいと考える学生たちが——そして卒業後は若い社会人が—— どんどん増えてきたために、それに応える場として、チェーンの居酒屋というのが必要性から次々に誕生してることになったと言えるかもしれません。ただ、こうした居酒屋が増殖することによって、さらに学生たちは「ノリ飲み会」のようなものがしやすくなり、広まったという面もあると思います。(1970年代頃までは、チェーンの居酒屋というのはほんのわずかしかなかった。)

(3)のジョッキの生ビールですが、これもチェーンの居酒屋が増えてくる中で一般化したものです。それまでは、ビアホールに行けばジョッキの生ビールを飲めましたが、通常の居酒屋ではビールと言えば瓶ビールでした。(特に、キリンのラガービールが圧倒的なシェアを誇っていました。) このジョッキでビールを飲むというのが広まることで「イッキ飲み」はさらにしやすくなったようなところがありました。

以上、簡単な分析ですが、現代のテニス・サークルの馬鹿な飲み方にも、間違いなく社会の変化が影響していることがわかると思います。そして、その馬鹿な飲み方という社会現象がまた様々な影響——特に潜在的逆機能——を生み出していることにも気づいてもらいたいものだと思います。

第10章 投票方式を変えてみたらどうだろうか (2013.7.15)

参議院選挙が近づいてきましたが、盛り上がりはまったく感じられません。100%自民党圧勝という結果が見えている選挙で、かなり投票率は低くなるでしょう。投票率は60%を切るのではないのでしょうか⁽¹⁾。投票に行きましょうという呼びかけはされていますが、そんな呼びかけだけで有権者が動くなら何も心配することはないのですが、そんな呼びかけだけではもともと行く気のない人は動きはしないでしょう。どうやったら、投票率は上がるでしょうか。今の時代なら、「ネット投票」にしたらいというのは現実的に考えられている案でしょう。確かに若者の投票率は上がるでしょう。ただ、高齢者是对応できないでしょうし、本人確認をどうするかが難しいところです。ここでは、実際には採用される事はまずありえない案を出してみたいと思います。

まず、これはずいぶん昔（「KSつらつら通信」第11号、1999年12月19日公開）に唱えたことですが、白票投票に意味を持たせるという案です。政党があまりに安易に離合集散を繰り返していた頃で、政党や政治に対する不信感が根強く、消去法でも選ぶ政党、選ぶ候

補者がいないという有権者が多かった時代なので、白票投票を可能にし、白票投票分だけ議席数を減らす（比例代表方式でしか使えませんが、たとえば白票が2割出れば、議席数を2割減らす）というアイデアでした。今回は、これ以外の突拍子もないアイデアを2つ提案してみます。

まず1つ目は、投票したら、「地域振興券500円分」がもらえるという制度を導入することです。これはかなり投票率が上がるでしょう。ただし、とりあえず投票に行けばいいのだろうという空気が生れ、さらにムードや風に流された選挙結果が出やすくなるでしょう。

2つ目は、逆に、投票権は500円か1000円で自分で買ってもらい投票するという方式です。これはAKB48の総選挙を見ながら思いついた案です。投票率は今以上に下がるでしょうが、本気の人たちしか投票に行かないので、風に流された選挙結果は出ないでしょう。本当に、伸ばしたい政党や政治家にしたい候補者がいるという人のみが投票を行い、ちゃんと政治を考えている有権者の意思が反映されることとなります。なんだったら1人で100票までは投票できるとしてもいいかもしれません。法の下での平等に反するということが現実には導入できない案ですが、多少豊かな人の意見が通りやすくなっても、それはそれで仕方がないのではないかと思います。政治に関心を持って、お金を払ってでも政治に関わろうという人たちだけで、政治家が選ばれるというのは、政治をまともにする方向ではないかとも思います。民主主義が衆愚政治になってしまっているのではないかという思いが、こんなアイデアを思いつかせたようです。

(1)投票率は、52.61%で戦後3番目の低投票率であった。

第11章 「ノリ」文化とTV (2013.8.5)

SNS全盛期に入って、おもしろ画像や映像を掲載し、それが問題視されるということが繰り返されています。今日見たTV番組では、チェーンの弁当店の大型冷蔵庫に入り込んだ若者、コンビニのアイスクリーム用冷凍コーナーに寝そべった若者、ハンバーガーチェーン店でパンを並べてその上に大の字になって寝ている若者の画像が紹介されていました。いずれも、企業は謝罪文を出したりお店を閉めたりする羽目になっています。これまでも、テーマパークの乗り物を止めたことを自慢気にアップした若者、手製爆弾の爆発する瞬間を映像として流した若者などもありました。みんなこういうことがちょっと非難される行為であることを知りつつ、「ノリ」やウケ狙いでやってしまうわけです。彼らの意識の中では、ちょっとした迷惑行為だという認識はあるけれど、まあ犯罪とまでは言えないし、

大迷惑というほどではないので、掲載して話題を呼んだら、ちょっと自分がスターになったような気分になれるので、やっけてしまっているわけです。第9章で分析した「イッキ飲み」も、サッカーの日本代表が大事な試合で勝った時の繁華街でのバカ騒ぎも、みんな同じように「ノリ」文化が生み出した風習です。なぜ若者たちはこんなにも「ノリ」重視なのでしょう。

大きなトレンドで言えば、日本が豊かになる中で、勤勉勤労、立身出世という価値観が薄れ、楽しい毎日が過ごせればそれでいいという刹那的な楽しみを求める価値観の持ち主が増えてきたことが原因でしょう。そして、このトレンドを強化する上で、大きな役割を果たしたのが、実はTVのバラエティ番組だと思います。熱湯風呂だの、熱いおでんを顔に押し付ける、爆薬を背負わせて走らせる、頭をはたく、食べ物を遊び道具として使う、など、お笑い芸人を中心に「ノリ」の一言で、笑いを取るために、視聴率を取るために、無茶なことをさせ、それをおもしろいことだと電波を通して広く知らしめたのは、TV局です。

そのTV局が他方で、ニュース番組やワイドショーで、こういう行為を批判したりするというのは、あまりにも自覚が足りないと思います。こんな「ノリ」事件が頻発するようになった今でも、バラエティ番組は相も変わらず、「ノリ」重視で、芸人に無茶なこと、馬鹿なことをさせ続けています。こういうことを本気でやめさせようとするなら、TV局自身がまずくだらない「ノリ」だけを重視したバラエティ番組をすべてやめるべきです。（ちなみに、私は、いじめの構造的誘発性としても、こういうバラエティ番組が間違いなく影響していると思っています。）問題となった画像を載せた若者たちにしてみれば、TV番組がやっているようなおふざけを、自分たちもSNSで発信してみただけなのに、という思いではないでしょうか。TV番組なら、女性アイドルの頭を蹴ろうと許されるが、SNSでそんな動画が出回ったら、あっという間に炎上するわけです。ネット全盛期とはいえ、価値観形成をしていく子供時代、青年期に見るTV番組の影響はまだまだかなり大きいものがあると思います。

第12章 静かなる革命——昭和一桁生れの女性たちが変えた日本——（2013.8.16）

このテーマは15年以上前から考えていたテーマで、いつかきちんとした研究論文にして発表しようと思っていたのですが、なかなか本格的に取り掛かることができないまま時間だけが過ぎてしまいました。この際、とりあえずこの論稿でその主張の骨格だけでも示し

ておこうと思います。

昭和20年代半ば頃から30年代半ば頃が結婚適齢期に当たる昭和一桁生れの女性たちは、実は静かにしかし大きく日本を変えてきた人々です。まず何よりも革命的だったのは、彼女たちが少子化を一気に進めたことです。少子化の進行と聞くと、若い人たちはここ20年ほどの事態と思っているかもしれませんが、最近20年よりも一気に少子化が進んだのは昭和20年代後半です。昭和24年6月に中絶が経済的理由でも許されるようになってから、女性たちは妊娠したら必ず子供産むという道以外の選択もできるようになりました。自分自身は5、6人が当たり前というきょうだいの中で育ってきた昭和一桁生れの女性たちは、自分はそんなにたくさんの子の母親にはなりたくないと思ったのです。子どもに教育を与え、貧しくないそれなりの暮らしをするためには、子どもの数が多すぎるのは望ましくないと考え、望まぬ妊娠をしてしまった場合は中絶を選んだのです。団塊世代と呼ばれる人口の大きな塊が昭和22年から24年生れの3年間ときっちり決められるのは、戦争が終わって男たちが帰ってきたことによる子どもの誕生期である昭和22年に始まるのは自然なことですが、昭和24年で終わるのは中絶が実質的に自由化されたからという人工的な理由なのです。そして、2人あるいは3人の子に——特に男の子には——高い学歴をつけさせたいと教育熱心な「教育ママ」になったのも、この昭和一桁生れの女性たちが最初です。

また、生活の洋風化、合理化を進めたのもこの世代の女性たちです。子どもに「ママ」と呼ばせ、料理本を見ながら、カレー、ハンバーグ、シチュー、スパゲッティ、オムライス、ピフテキなど、カタカナ料理を食卓に並べていったのです。自分自身は母親のことを「ママ」などと呼んだことはなく、和食で育った世代だったわけですが、戦後のアメリカに対する憧れから、食生活も洋風化することが豊かな生活なのだと信じた世代でした。クリスマスを祝う習慣もこの世代の女性たちが母親となって広めた習慣です。食事以外の家庭生活でも、「三種の神器」と呼ばれた冷蔵庫、洗濯機、テレビを、多少無理してローンを組んでも家庭に取り入れ、家事の合理化、省力化を進めた世代です。このように見ると、現代の私生活のベースはこの昭和一桁生れの女性たちが形成したということが理解できるでしょう。

もちろん、この世代が革命的な変化をなしたのは、この世代が突然変異的な特殊性を持っていたからではなく、生きた時代が彼女たちをしておのずとこうした変化を選び取らせたということです。少女時代を戦時下でたくさんのきょうだいとともに貧しく過ごし、戦争直後の食糧難を豊かなアメリカを意識しながら経験し、結婚し始めた頃に始まる高度経済成長期の波に乗って、憧れのアメリカ的生活様式——戦後一気に解禁されたハリウッ

ド映画などによって伝えられた——に少しでも近づきたいと思ったわけです。今の若い人たちは、「アメリカより日本の方がクールだ」と無意識に思い、アメリカに行きたい、アメリカのまねをしたいと思わなくなっているのも、時代のなせる業でしょう。時代が人々の意識を作るのです。今や昭和一桁生れの女性たちの多くは80歳代となっていて、若い人から見たら、日本の伝統を大切に地味に生きてきた「おばあちゃん」たちという印象になるのではないかと思います。実は日本社会の少子化、学歴社会化、食生活の洋風化、家事の合理化・省力化といった趨勢的変動を引き起こすうえで重要な役割を果たした人々だったのです。

第13章 リニアモーターカーは必要か（2013.8.29）

リニアモーターカーによる中央新幹線の営業用車両ができ、時速500kmを出したこと、東京-名古屋間は2027年開業で40分で結び、新大阪までは2045年開業で1時間ちょっとで結ぶことなどが、ニュースで流れていました。速いことは速いですが、果たして日本にリニアモーターカーは必要なのでしょうか。おそらく、東京-大阪の移動手段としては、現在の東海道新幹線と航空機で十分で、中央新幹線は必要ないと思う人がほとんどでしょう。むしろ、これができてこちらを使わせるために、現在10分に1本走っているのぞみが減らされたりしたら、その方が不便です。東海道新幹線の本数が減らされなければいいのですが、これまでのJRのパターンで行けば、新しい高速ルートを作った場合は、並行して走る路線はなくすか減らすことになるでしょう。東海道新幹線と中央新幹線は大分離れていますので、東海道新幹線がなくなることはないでしょうが、のぞみの本数は減りそうです。

国民の多くが望んでもいない超高速交通が作られるのは一体なぜなのでしょう。ひとつには、技術者の限界に挑戦したいという夢があると思います。しかし、この夢の実現のためには、莫大な費用がかかります。その費用はJR東海だけでは賅えず、様々な名目で、国からの税金が回されています。多額の税金をこの事業につぎ込む正当性は、このリニアの技術が完成すれば、世界に売り込めるということなのだと思いますが、果たして本当に売れるのでしょうか。より速く移動できる航空機がこれだけ普及している中で、わざわざ多額の費用をかけて専用のルートを作り、リニアモーターカーを走らせようと思う国がそういくつもあるとは思えません。結果的に開発費用は回収されることはなく、日本の山の中を通り抜けて行くだけの無駄に速い交通手段というままで終わってしまうのではないかという気がしてなりません。

第14章 恋愛消滅時代 (2013.9.10)

少し前のニュースですが、ブライダル総研という会社がインターネットを使って行った調査で、20歳代男性で女性との交際経験なしが44.3%もいたという調査結果が発表されました。一般的にはテレビのニュースで取り上げられるほどの驚くべき数字なのでしょうが、日頃から大学生を見ている私にとっては、「やっぱりそうなのか」と思われた数字でした。もちろん、インターネット調査ですから、インターネットをまめに使わないような層は抜け落ちており、20歳代男性層を偏りなく代表している調査結果ではないかもしれませんが、今やインターネットもかなり日常的ツールになっていることを考えるなら、まったく意味のない数字ではないでしょう。また、大学生たちにとってはインターネットは常にそばにあるようなものですし、20歳代の中でも下の方の年齢に属しますので、もしかしたら交際経験なしの男子学生はもっと多いのではないかという気がします。

私は、自分のHPの「KSつらつら通信」というコーナーで何度も恋愛について書いてきました。2002年には、「第86号 恋をしようよ、男の子! (2002.7.10)」と呼びかけましたが、時代はどんどん恋愛離れが進み、2005年には、「第164号 友人になってしまう男と女の時代 (2005.7.10)」になっているようだと言及しました。その後も、「第307号 「草食系男子」を生み出す社会の仕組みと今後 (2008.12.30)」を書き、恋愛が消えていく原因とそれを克服するためにはどうしたらいいかを考えてみましたが、結局2009年の暮れに、「第357号 現代の若者の恋はどうやって始まるのだろうか? (2009.12.23)」と、もはやお手上げだと白旗をあげて、恋愛については3年以上書いてきませんでした。そして、今回の調査結果ですから、ものすごく納得してしまったわけです。

テレビでインタビューを受けていた彼女がいない若い男性たちは、全然落ち込んでいる感じではなく、「恋愛ってめんどくさくないですか? 友だちという方が楽しくて気楽ですよ」と何の気負いもなく語っていました。そう、恋愛は昔からめんどくさいものなのです。でも、昔はそのめんどくささを乗り越えてでも得たいものがあったのです。でも、今はそんなめんどくさい思いをせずにも手に入るものになってしまっているんでしょう。そうなれば、リアルな世界では「草食化」するのは当たり前でしょう。今や恋愛とは、結婚する前にその前段のプロセスとして、その状態にあったことにしていないと格好悪いからという理由だけで必要とされている気がします。結婚をまだ意識しない人にとっては、「おままと」のような「デートごっこ」をするために必要なものというところでしょうか。もはや「恋愛消滅時代」に入ったと言っても過言ではないように思います。

男も女も欲しいのは癒やしです。それは友人でも、アイドルでも、ネットゲームの王子様でも与えてくれます。むしろ、リアルな異性はわがままだったり、勝手だったり、だらしなかつたりした姿を見せて、しばしば癒し以上にいらだちを与えてくれたりします。となれば、要らないですよ、リアルな恋愛なんて。「恋愛消滅時代」とは、恋愛が「ごっこゲーム」か、あるいは結婚という「大人人生」のスタート地点に立つための短い助走路としての役割でしかなくなってしまった時代のことです。かつて、「第53号 「愛」と「恋」（2001.5.18）」の違いについて書いたように、そもそも「癒し」なんか求めるのは「恋」ではなく「愛」なのです。今の若い人たちが求めているのは、「愛」であって「恋」ではないのだと思います。「恋愛」という言葉は両方の字が入っていますが、通常は「恋」と同義で使われてきました。それが消えつつあるということです。まあでも、そもそも恋愛なんて、近代とともに誕生したものですから、近代という時代が揺らぐ中では、消えて行くのも不思議はないのかもしれない。

第15章 おしゃれの変化（2013.11.24）

おしゃれかどうかというのは、かつてはほぼ若い女性たちのみの関心事項だったのですが、今や子ども、中高年、男性たちにも広がってきています。なぜおしゃれであろうとする層がこんなに広がったのかについて分析してみたいと思います。そもそもおしゃれとは何かという根本的な問いは置いておき、とりあえず、外見的なファッションセンスがいいことという一般的なイメージで考えたいと思います。生き方がおしゃれだとか、家具がおしゃれだとかは、ここでは対象としないことにします。

では一人は何のためにおしゃれであろうとするのでしょうか。ストレートに言ってしまえば、かつては異性（特に男性）に対して魅力的な存在に見えるように（若い女性たちが）おしゃれをしていたのだと思います。男性中心社会の中で、男性に選ばれる立場に置かれていた若い女性たちはおしゃれであろうと意識的、無意識的に努力をしていたのだらうと思います。動物の世界では、メスがオスを選ぶことが多いので、オスの方がカラフルな羽毛を持っていたり、装飾的なものをもっていたりします。綺麗な羽を持つ孔雀のオスがそれを見せびらかすのは、メスに求愛をするときですし、ライオンのオスのタテガミは黒っぽくてふさふさしている方がメスに好まれるそうです。動物の世界では、より優秀な子孫を残せそうかどうかを、オスが外見的な魅力で示しているわけです。人間社会は長らく男性が女性を選んできましたので、選ばれる立場の女性たちは、おしゃれをして自らの

女性としての魅力をアピールしてきたわけです。

しかし、ここ20～30年の間に、男女関係は変化し、男性が選ぶ側、女性が選ばれる側という構図は崩れてきました。逆転したわけではありませんが、男性もしばしば選ばれる存在になることはあり、男性もおしゃれになろうというひとつの動機づけになっていたかもしれません。おそらくそれより重要なのは、そもそも男女の恋愛・結婚がかつてほど重要ではなくなってきたという点です。結果として、おしゃれは異性に選ばれるためにするという意識がほとんどなくなり、自らを輝かすため——アイデンティティ確立のため——に行うものになってきたのだと思います。異性に選ばれる（気に入られる）かどうかを気にせずに、自分自身が気持ちよく生きるために必要なものになったおしゃれは、若い女性たちだけでなく、異性に選ばれる段階にまだ届いていない小中学生や、もはや異性に選ばれることは基本的にない年齢である中高年層にまで広がっていくことになったのです。ほとんどの男性が好まないギャルメイクも GANGRO のようなおしゃれも、異性に選ばれるためではなく、自分を輝かすために行われていると考えれば、よく理解できます。男性も内面的な魅力で自分を輝かすより、外見をおしゃれにすることで輝けると思う人がでてきてもおかしくありません。おしゃれをする意味が変わってきたために、幅広い年齢層にまで広がったというのが私の解釈です。

第16章 日本と中国が戦争をする可能性は小さくないのでは？（2014.2.11）

昨年くらいから秘かに思っているのは、日本と中国の間でこの数年以内に戦争が起こる可能性は小さくないのではないかということです。もちろん全面戦争ではなく局地戦争のイメージですが。紛争の焦点となるのは尖閣諸島問題です。中国がもしも尖閣諸島を実効支配しようとしてきた時には、日本は——安倍内閣であれば確実に——自衛隊を出動させ実力で阻止しようとするでしょう。そこで互いに武力行使が行われ、戦端が開かれるという予測です。

こういう領土をめぐるの局地戦は戦後社会において何度も勃発しています。中東では頻繁に起っており若い人も知っているでしょうが、1982年に起きたフォークランド紛争はご存知ですか。アルゼンチン沖のフォークランド諸島の領有をめぐるイギリスとアルゼンチンが約3か月にわたって戦い、両軍合わせて900名以上の死者を出しています。島の領有権をめぐるの戦争という点で、尖閣諸島問題とも類似点が多いです。また、中国は、インド（1962年）、ソ連（1969年）、ベトナム（1984年）とそれぞれ国境をめぐる戦争を

しており、国境をめぐる戦争することに躊躇のない国です。日本にはこれまで背後にアメリカがいるという意識があり、簡単には手を出しにくいという印象を持っていたかもしれませんが、中国がアメリカとの関係を良好にしつつあるのに対し、日本は安倍首相の靖国参拝問題などでアメリカの覚えもめでたくなりつつあり、アメリカが尖閣諸島問題に対しては中立の立場を取るだろうと、中国が判断した時には実効支配という手段に打って出る可能性はかなりあると思います。中国は個別日本との戦争なら軍事力で負けないという自信を確実に持っているでしょう。

さて、もしもそういう行動に中国が出た時に日本がどうするかですが、かつて1953年に竹島を韓国が実効支配した時のように、抗議の声をあげるだけで実力行動を起こさないということにはならないと思います。当時は、まだ第2次世界大戦の傷跡も深く、戦争に対する忌避感が国民全体に浸透していましたので、小さな島ひとつで武力行使などできない——そもそもまだ自衛隊ではなく保安隊と言っていた時代で十分な戦闘能力ももっていませんでしたが——という空気だったろうと思います。しかし、今は違います。国を守ることを前面に出す都知事候補が、東京だけで60万票以上票を獲得する時代です。もしも尖閣諸島が実効支配されたら、実力で排除すべしという声が高まるのは確実です。とはいえ、できたら戦争したくないという気持ちを持つ人がまだ多数派でしょうから、アメリカ軍が排除してくれないかなと期待する人が一番多いでしょう。ただ、アメリカは最初の時点では介入してこないのではないかという気がします。中国との関係が悪くない今、アメリカにとって、尖閣諸島が日本のものであろうと、中国のものであろうと、平和であればいいというのが本音なのではないかと思います。特に日本の味方になってくれるとは思えません。こう分析してくると、やはり日本は中国と戦わざるをえなくなるという結論にたどりつくわけです。

実際戦争が始まったらどうなるでしょうか。今の両国の軍事力、士気から言って、日本が独力で勝つことは難しいように思います。負けて尖閣諸島を取られる可能性も高いように思います。日本にとってましな落としどころは、アメリカが仲介役に立って、尖閣諸島は両国の共同統治にするといったところでしょうか。それでも、現在の尖閣諸島は日本固有の領土であり、領土問題は存在しないという立場からは大きく後退することになります。つまり、中国との戦争になったら、日本はかなり不利な状況に追い込まれることになります。中国がそういう行動に出ないようにするためには、巧みな外交戦略——特に日米関係のさらなる緊密化（というよりアメリカの支配下に入るくらいのプライドを捨てた関係）——が必要でしょうが、「日本の誇り」やプライドが高まりつつある今、それもまた難しい

ように思います。戦後70年が近づいてきていますが、やはりこれだけの時間が経つと、前の戦争の記憶——記録ではなく——は消えてしまい、再び人は戦争をしてしまうものなのかもしれません。

第17章 長寿は幸せなのだろうか (2014.2.13)

最近、東京の高齢化が今後急速に進んでいくといったニュースや認知症の人を取り上げたテレビ番組を見ながら、「長生きをするというのは幸せなのだろうか？」という疑問が湧いてきています。確かに、「長寿社会」というのは、豊かで衛生面もよいからこそ可能なものであり、そういう社会になっていることは外向けには誇り得ることでしょうが、リタイアし年金生活になる65歳以上の高齢者が人口の3分の1を占める日も近いとか、そのうちの半分は認知症発症率が非常に高い後期高齢者になるという話を聞くと、内実は大変なことになると思わざるをえません。マクロに社会を見た場合、実は多くの人あまり長生きをされると困るわけです。しかし、どの人も死ぬことは悲しいことですので、助ける手立てがある限り、本人も周りの家族もそして社会もなんとか生きよう、生きさせようと努力します。結果として長寿社会が現出するわけです。あまり誰も指摘していませんが、これも「社会的ジレンマ」（個人的な合理的の行為選択が、集団全体としては不合理な結果を導く状態）と言えるのではないのでしょうか。

私も最近では己の人生の終わり方について時々考えるのですが、ボケて人に迷惑をかけながら生きたくはないということだけは強く思います。人を人たらしめているのはやはり脳であって、その脳の機能が狂い始め、自分を自分たらしめていたようなこと——私の場合なら、こんな風にものを考えたり書いたり話したりといったことでしょうか——ができなくなってしまうたら、もう人生は終わったようなものだと思わざるをえません。しかし、現代の医学では脳の寿命が尽きかけていても、身体そのものの機能はまだ十分に維持されたりしているのでやっかいです。数十年前までは、脳の寿命よりも身体の寿命が先に尽きる人の方が圧倒的に多かったと思いますが、今は必ずしもそうは言えないだろうと思います。現時点でも、軽度の認知症である予備軍を含めれば、65歳以上の高齢者の15%、400万人以上いるそうです。記憶力も思考力も徐々に衰えていくのはある程度は仕方ないことでしょうが、周りを困らせるようなレベルになったら、生きているのはつらいあと個人的には思います。

しかし、現状ではそういう人が確実に増えることが予想されるわけです。人生にも定年

制があればどうだろうかなんてこともふと思います。人生80年定年でそれ以降は生きたい人は生きてもいいけれど、自分の人生を閉じたい人は閉じてもいいなんてルールを導入することはできないでしょうか。ベネルクス3国やスイスでは安楽死が法的に認められています。たぶん安楽死は不治の病に侵され痛み等に耐えきれないといった場合がほとんどでしょうから、私のアイデアはもっと過激なものになってしまいますが、致死量の薬が医師から合法的に処方してもらえるといいなと思います。まあ管理がしっかりしていないと、処方された人以外が使うといった事件も起きそうですが。死ぬということをマイナスにしか受け止めにくい社会ですから、こんな私の考えは暴論としか思われませんが、個人的には80歳まで生きられたら、あとは致死量の薬をもらっていつでも自分の人生を閉じられるように準備しながら生きたいなと思います。

第18章 「伊達マスク」だったのか！（2014.3.31）

ネットニュースを見ていたら、「若者に多い伊達マスク」というタイトルがあり、気になって見てみました。「伊達マスク」とは、咳やくしゃみの迷惑防止、花粉防止、保湿効果などの本来の目的ではなく、ファッション（?）、仮面、コンプレックス隠し（すっぴん隠し）、コミュニケーション忌避、などの理由でマスクをすることを言うそうです。そして、そういうマスクの使い方をする人が若者に増えているのだそうです。

この記事を読んで、「そういうことだったのか！」と合点がきました。というのは、1年数か月前に、1回生の少人数クラスで経験していた事実があったからです。5名のグループの発表だったのですが、そのうち女子2名と男子1名がマスクをしたまま発表したので、声がこもって聞きにくいし、特に咳やくしゃみも出ているわけではなさそうだったので、「聞き取りにくいから、マスクをはずして喋ってくれないかな」と言ったところ、男子1名はマスクをはずそうとしたのですが、女子2名がまったくはずそうとしなかったため、男子1名もまた慌ててマスクをつけ直し、結局3名ともそのままマスクをしたまま発表を続けたということがありました。想定外の若者の行動に不快感が納まらず、当時のゼミ生たちに「こういうことって、ありなのかな？」と尋ねたものでした。ゼミ生たちは、私に気を遣ったのかもしれませんが、「それはありえないですね」とみんな言ってくれて、「やっぱりそうだろう」と安心したものでした。

しかし、その後見ていると、翌年の少人数クラスでもマスクしたまま発表する学生はいました。なんかもういちいち注意するのも面倒になってきてしまい、もう気にしないでお

いた方がいいのかなと思うようになり始めていました。今回の記事を読んで納得ができました。若者たちの「新マナー」の中では、マスクをしたままコミュニケーションを取るのには「あり」になりつつあるようです。

かつて女子学生がジーンズを履いて授業を受けるのを認めず教室から出て行かせた外国人教師がいましたし、最近まで帽子をかぶって授業を受けるのを認めず「帽子を取りなさい!」と注意する年配の先生も結構いました（まだいるかもしれません）。私は、ジーンズはもちろん（笑）、帽子も構わないと思っていますが、この「伊達マスク」にはまだ抵抗が強いです。なんでもかんでも若者に合わせるだけがいいわけではないでしょう。今回記事を読んで改めて「伊達マスクは認めない」と言い続けようと心に決めました。海外では、正当な理由でのマスク使用ですら、不審者扱いをされたりします。顔を半分近く隠すマスク装着行為は、余程の必要性がない限りすべきではないと思います。

おわりに

東日本大震災から3年以上の時間が経ち、忘れたわけではないですが、福島県以外の多くの人は日常に追われ、大震災から間がなかった頃の危機感と今後の日本社会のあり方を考えることから離れつつあります。むしろ、最近では「日本を立て直そう」という議論が、近隣諸国との関係の悪化から政治的な保守化に向かうような空気になりつつあるような気がします。この空気を生み出している社会的背景はなんなのか、このままこういう方向に突き進んでいくのか、われわれ社会学者はしっかり見据えていかなければならないと思います。

本稿では、そこにだけ焦点を当てているわけではないですが、社会の様々な変化がその後の社会のあり方を決めて行くことは間違いないわけです。常に、社会の動きに注目し、趨勢的变化を捉えて行く、こうした試みを今後も続けて行きたいと思っています。

—2014.6.28受稿—